

み心の信心 ——主イエスと無原罪のマリアに——

「愚か者の樂園」で暮らすということは、私たちに許されるものではありません。それは、私たちが先祖より賢明だからではなく、この世は決して樂園ではないことが目に見えて明らかだからです。1920年代、私たちはのんきに暮らしながら、実は世界大恐慌へと向かっていました。1930年代には、同様にして、第二次世界大戦へと突き進みました。1940年代、私たちは断固として勝利と平和に向かっていったのですが、結局、平和を維持するためには強国が原子爆弾を蓄えねばならない、ということを手で学んだだけでした。

ヒトラーは、「大いなる嘘」を考え出したとされています。その嘘は、あまりに巨大で、仰天させられる代物で、突飛なので、これを否定する声は弱々しく聞こえ、無視することはそれを承認することのように思われ、一切の論駁は、誰も気にも留めない、回りくどく複雑な机上の空論、小心者のこだわりの産物と見なされたほどです。しかし、「大いなる嘘」というものは、ヒトラーの発明でも専売品でもありません。サタンこそが、大きな嘘であれ小さな嘘であれ、また他者に対する欺瞞であれ、自分自身に対する偽りであれ、すべての嘘の父なのです。悔い改めることのない、合理化されたすべての罪もまた、嘘です。罪は時々生じますが、合理化が生んだ嘘は、常に私たちと共に残ります。それは私たちの理性（マインド）を曇らせ、その努力を間違った方向へ向けさせ、私たちが必要とする真理を捉えることを妨げ、感覚の迷い、理性の迷い、心の迷いの上に、暗闇に灯る常夜灯の魅惑的な光を投げかけるのです。

八百万の神々

嘘は罪の数だけあり、罪に似て、小さかったり大きかったりして、家庭、経済、社会、政治、文化、宗教など、あらゆる分野での必要に応じようとします。ある嘘は、ほんの二、三日しかもちませんが、あるものは二、三年、またあるものは二、三十年、長くは二、三世にも続きます。その時代に最も適合する嘘は生き残りますが、その時にそぐわないものは、ただちに他のものにとって代わられます。いったん目の見えなくなり長い間忘れられていた嘘は、もう信じられなくなりますが、嘘が通用していた間は、それも十分まことしやかなものでした。多神論なるものを例にとってみましょう。最初に神なる御方にある名前と特定の居場所とを与えた人物は、神を愛していたことでしょう。彼はおそらく、その神が家庭と炉端の神となれば、もっとよく礼拝されるだろうと考えたのではないのでしょうか。さてしかし、家庭と炉端は無数にあります。そしてもし炉端の神々がいるなら、畑の神々もいるはずですが、畑の神々がいるなら、工芸の神々が、工芸の神々がいるなら、まさにその工芸が繁栄した都市の神々もいるでしょう。もし都市の神々がいるなら、国々の神々もいるはずですが、戦争の神々、政治、商業、芸術、文学、健康、飲食、愛、情熱、それぞれの神々——実際、すべてのための神々がいるのではないのでしょうか。そうした神々は存在していました。

虚偽から生じる虚偽

虚偽に関わる不思議な論理があります。それは、まさに真理に関わる論理と同じものです。真の前提から必然的に真の結論が導き出されますが、これと同様な論理的力によって、偽りの結論が偽りの前提から導き出されます。一方、ひとつの真実を支えるためにさらに多くの他の真実を必要とするように、ひとつの嘘を通そうとするなら、さらに多くの他の嘘を必要とします。嘘をつくことは、命の作用がそうであるように、他の嘘を産み、数を増し、繁殖します。進むほどに、嘘は強く巧妙なものになっていきます。けれども、もしそれらの嘘を個々に取り上げるなら、小枝のように簡単にへし折ることができます。しかし嘘というものは、単独で生じることはなく、対でも七重でもありません。どの文化にあっても、嘘はまるで風土病のように広まり、疫病のようにはびこるのです。全く新しい嘘に出くわすということは、一つの異文化を相手にするようなものです。

西洋を理解しようとする東洋からの旅人は、西洋の暗黒時代へと遡る必要があります。暗黒時代の混沌からついに国家が出現した時に、教会と国家の問題も発生したということが分かるでしょう。この問題については、現在、非常に相反する種々の見解があります。また、宗教改革の時代にも戻る必要があります。国家は教皇から、またそれに伴って神の法から解放されましたが、新しい宗教がそれをいかに助長したかがわか

るでしょう。それらの宗教によって、君主や改革者や敬虔な信徒たちは自らを「教皇」とするにいたったのですから。さらに啓蒙運動の時代にも戻る必要があります。その時代に、大勢の「教皇」たちの相異なる見解や不一致が山積して、キリスト教は日曜日だけの信仰に追いやられ、重要な事柄の判断については純粹理性が全権を委任されることになったのですから。しかしその一方で、純粹理性を掲げる代表者たちもまた、諸宗教の代表者たちと同様に一向に合意に達することができなかつたために、手っ取り早く「寛容」へと向かいました。普通、寛容とは、キリスト教的愛徳の新しくより深い理解から生じるものとされていますが、しかしその言外の意味合いは、ある真理が根本的であればあるほど、実際にはあまり重要ではない、ということ。けれども、本来、根本的な真理は重要なはず。非宗教的な大学や、国家の教育システムに見られる徹底した精神性の欠如は、息詰まるほど耐え難いものです。人々は確かに、大小さまざまな災難にまごつかされることにうんざりしていますし、政治家たちも根本的諸真理に頭を悩ましてはられないのですが、彼らは最低限、人々が何を信じているかについては関心をもたねばなりません。国民は共通の信念によってのみ、事実と直面し、犠牲を払って働き、生涯を乗り越え、問題を解決することができるからです。

かくして東洋からの旅人は、西洋史の延長としての現代を理解するはず。それは、西洋の公然の神話と科学的プロパガンダの時代、恐ろしく効率的なノウハウと予測のつかない未来に脅える時代、夢見るような熱狂と絶望で麻痺してしまった心の時代、原理原則の放棄と神経症的な罪悪感の時代、外交的不手際と全面戦争の時代です。やはり、「愚か者の樂園で暮らす」ことなど許されないのです。

真理の証し

「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」(ヨハ 18:37)。私たちの主ご自身が、この世でのご自分の使命をこのように描写されました。主は人間が何を必要とするかをご存知でした。そして人間は自分の力だけではその必要を満たすことができないこともご存知でした。「わたしはこの世のために祈るのではない」(ヨハ 17:9) ともおっしゃいました。この世とは、人間がそこに編み込まれて暮らしている嘘の網、そこで人間が空しくあがいている網、人間にはそこから抜け出すことができない網のことではないでしょうか。はっきり言って、どんな力が救世主ご自身を有罪とし、十字架につけたのでしょうか。ファリサイ派の傲慢からくる嘘、既得権からなる既成の秩序から生じる嘘、ピラトの正義の嘘、そして「その血の責任は、我々にある」(マタ 27:25) と叫んだ人々の奇妙で熱烈な同意以外のなにものでもありません。

「真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」。しかし一体だれが、ただ真理にのみ属しているというのでしょうか。聞こえない者たちがいます。聞こえても聞き従わない者たちがいます。聞き従っても、従い続けることができない者たちがいます。その種は道端に落ちます。石ころだらけの土地に落ちます。茨の中に落ちます。そして良い土にも落ちるのですが、収穫高はなんとまちまちで、聖性が百倍になることなどなんと稀なことでしょう！

恵みと祈り

けれども神の力が及ばぬことはなく、祈りの力が衰えることもありません。迫害者パウロは地に倒され、異邦人のための使徒パウロとして立ち上がりました。侵略して来た異邦人たちの回心の上に、西洋のキリスト教界は築かれています。歴史上では、トルコ軍はレパントで足止めを余儀なくされました。一方キリスト者の生活においては、キリストの御声を聞くためには神の恵みが必要です。そして神はその恵みを、これまでと同様に豊かに与えてくださいます。神の恵みは、キリストの教えを生きるためにも必要ですが、その恵みもまた同様に、惜しみなく与えられています。

現代の根本的な問題が、真理に到達してその真理に忠実に生きるという、人間にとっての永遠の問題であるとすれば、その実践的な課題は祈りです。異教の神バールの祭司たちと違って、私たちには叫ぶ必要はありません。神は遍在し、全知全能です。神のうちに、私たちは生き、動き、存在しているのです。神なくしては、私たちは何もできません。けれども、信仰、愛、忍耐、神への委ねが必要とされます。考えるだけでは、自分の背丈をいささかも伸ばすことはできません。同様に、男性であれ女性であれ、青年であれ少年少女であれ、子どもであれ、簡単に祈りの人にはなりません。しかし、聖徒の交わり、すなわち他の人々の祈りによって、神が祈りへと招いた人々の執り成しの祈りのおかげで、他の時代と同様私たちの時代にも、祈るために生きる人々が存在し、命がけで祈る人々が存在します。そしてまた、内なる恵みに導かれるままに、

たゆまぬ執り成しの祈りを捧げて、人類という沈没しかけている老朽船を神の近寄り難い光につなごうとする人々も存在するのです。

悪が現存し、苦難が予想されるただ中であって、それこそが、イエスの聖心と無原罪のマリアの聖心への信心の意義なのです。かつて使徒たちが悟ったように、追い払うべき悪霊たちが存在しますが、それは単なる命令ではなく、祈りと断食とによってなされるものです。神を見た者はいません。ですから教会は私たちの想像力を、キリストの愛のシンボル、どんな人間にも及ばない偉大な愛を示す聖心というシンボルへと向かわせまします。私たちの中には、聖母に一度も助けを願ったことがない者はいないでしょう。それで教会は、私たちの想像力を、聖母の無原罪の聖心へと向かわせるのです。私たちは、信仰と愛、忍耐、神への委ね、犠牲と償いの業のうちに、真理がもたらす祝福と神の栄光を、この世と後の世のために、聖心に向かって祈り求めるのです。

訳注

(1)ひどい現実を知らずに、あるいは現実から目を背けてのんきに浮かれて生きること。

‘Devotion to the Heart of Jesus and the Immaculate Heart of Mary’ An article published in The Canadian Messenger of the Sacred Heart⁶¹ (June 1951) 345-48. See above, p. 92, n. 1.

ミサと人間

数年前、カナダから来たカトリック信者でない人が、日曜日の朝ワシントンのカトリック教会に立ち寄った。その建物が気に入ったわけでもなく、彫像や他の装飾が好きだったからでもない。そこは、主に黒人でいっぱいだった。ミサが行われていた。司式司祭も黒人だった。その上、近隣の大使館から来ている人も多かった。その光景には考えさせられた。なぜなら、ワシントンの人種感情はよくコントロールされていても、それが生きているからである。「何！」彼は驚いた。「建物が悪趣味で彫像は見るに堪えないが、そんなことは問題ではない。ここには様々な人種の、様々な地域から来た男女が、互いの違いを忘れて、一つ屋根の下に集まり祈りのうちに一致して神を礼拝している。」

このことを世界全体に広げてみよう。新聞や雑誌を手にとると次のようなことが目に飛び込んで来る。中国での共産主義者の闘争、インド・中国間の政治不安、オランダ植民地で、ビルマで、インドで、ペルシャやトルコにのしかかる隣国からの不穏な圧力、パレスチナやギリシャで長く続く深い苦しみ、鉄のカーテンの向こうにある自由のない苦しみ、西ドイツ、イタリア、フランスそしてイギリスにさえもある種々の苦悩。アメリカでは、長引くストライキや、摘発された或いはまだ摘発されていないスパイグループが目につく。人類という家族は分裂されているが、ワシントンのあの教会の共同体は分裂していなかった。しかし、全人類を脅かす巨大な分裂の哀れな光景に促されて、私たちの教皇ピオ十二世は六月の祈りの意向を「ミサ聖祭によって人間社会を救うための力がいただけますように」とした。

カルワリオの象徴性

ミサは私たちにとって主の受難と死を記念するものである。主の受難とそれを負わせた悪のうちに、人類を苦しめる悪の典型と象徴を人は容易に認めることができる。裏切りにまで身を落とした食欲はユダのなかにある。人殺しさえやりかねない情欲はヘロデのなかにある。政治的御都合主義は、「その男を皆のために殺せ」と駆り立てた。扇動された群衆は「殺せ！殺せ！」と叫びをあげた。高官は臆病に手を洗った。稼ぎにしか興味がない頑丈な下役は彼をむちで打ち、茨の冠をかぶせ、あざけり、十字架につけた。現代の飢えている人たちに、彼はただ「渴く」としか言えない。極めて貧しい人たちに、彼は御自分の裸しか示すことができない。迫害を受けている人、奴隷の状態にいる人、投獄された人、拷問を受ける人、死に瀕した人に対して、彼の傷は叫ぶだろう「私もそれを通して来た」と。

しかしながら、カルワリオの真の意味は、これらの外的な出来事のうちにあるのではない。多くの人たちが不正な裁判で有罪とされ、拷問を受け死に引き渡されてきた。罰の重さは、何らかの形で判決の不正義を覆い隠してしまっただけかもしれない。主の不正義な受難と無情な死は私たちの考えをはるかに超えるものであり、誰一人にも当てはまらない異なる質のものである。では、主の受難と死が私たちの心をこれほど捉えるのは、彼が発揮された高潔さの故なのだろうか。飾らず単純にこれから起こる衝撃的な出来事を前もって語られた勇気；ゲッセマネの園で一人になられた時に、ただ御父の御旨を受け入れた切れることのなかった一本の心の糸を別とすれば、溶けて消えた勇気；公衆の目前で試された時、平穩に的確に、主に沈黙の尊厳のうちに侮辱を受け入れた勇気に惹かれるのである。

私たちは、主の勇気に惹かれるように、主の思いやりにも心を動かされる。一般に人々は、恐れる時や苦しむ時に、自分自身に目を向ける。マインドの視野は狭まり、その心は惨めになる。自分自身のことしか考えず、恐怖と苦しみのうちに自分の他に誰にも思いを馳せない。誰よりも自分自身を愛し憎しみに負けて、恐れに向き合いながら苦痛に耐える。しかしながら、主はピラトに対し、彼の罪が最大の罪ではないことを指摘した。主は嘆き悲しむ婦人たちに言った。「わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。」(ルカ 23・28) 主は彼を十字架にはりつけた人たちのためにさえも祈られた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ 23・34) 苦難はイエスの真理の偏りのない把握を損ねず、不正もイエスの心を閉ざさなかった。

カルワリオの意味

しかし、倫理的徳のこの輝きでさえ、カルワリオの真の意味ではない。私たちは、単に人間の目をもってしか人間的な事柄を見ていない。徳とは人間的業績とその完成と考えてきた。苦難を最大の悪として考えてきた。罪とは仲間を傷つけることと考えてきた。しかし、真実を知りたいと思い、物事をありのままに知りたいと願い、すべての部分的で不完全な欺瞞—大抵は自己欺瞞—から抜け出たいと望むなら、私たちは自分の目ではなく神の目で見なければならない。しかし、どうしてそのようなことができるのか。どのようにして自分の認識を手放し、神の認識を身に付けることができるのだろうか。

神が啓示された御言葉への信仰、神が教えられた確かな真理を信条で受け入れることにより、神御自身が知っておられることを、私たちは知ることができるだけでなく実際に知るのである。私たちが「信じます。信仰のないわたしをお助け下さい。」(マルコ 9・24) と肯定し祈ることさえできれば、無限のマインドの深みと神聖な判断の不偏性は、私たちの容易に届くところにある。しかし、信じることは子供っぽいことだろうか。それは子供らしいことだが、「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」(ルカ 18・17) 他方では、それは幼稚なことではない。ガリラヤの漁師はこう言った。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」(ヨハネ 6・68)。今日、それを越える学識や知恵はどこにあるのか。ペトロに勝る学識と知恵を身につけることはできない。

カルワリオの意味は信仰によってのみ知ることができる。論じることや理解することによってではなく、おもに信じさせてくださいと祈ることや信じることによって知ることができる。聖母の祈りを一回唱えることは、二冊の分厚い本を読むよりも、そして長い講義を多く聞くよりも、15 分の祈りの思い巡らしの方が、ずっと助けになる。

たとえ私たちが理解しなくても、信仰によって私たちは、苦難ではなく罪が最大の悪であることを知っている。罪が最大の悪と言えるのは、人を傷つけるからではなく、神に刃向かおうとするからである。しかし、なぜ神は気に留められるのだろうか。神が傷つけられることは可能なのだろうか。ともかく、信じることは、理由を知ることではなく、神の御言葉に頼ることである。一方、一旦信じると、人は子供のようにかすかであつても、理解できるようになる。つまり、私たちの近くにいる人—母親、姉妹、妻、父親、兄弟、夫—を軽んじるのは、自分にそれ程近くない人を軽んじるよりも悪いことである。私たちのことに關心のない人よりも私たちが愛している人を軽んじることの方が悪い。しかし、神より私たちに近い者がいるだろうか。親たちは私たちがを生き育てる。しかし、神は私たちがを創造し存在し続けさせる。夫と妻は、互いの生活を共有する。しかし、人と神は、永遠の命を共有する。神よりも私たちがを愛する者がいるだろうか。愛そのものである神、他の多くの人たちがを愛されるからと言って、私たち一人ひとりをより少なく愛されるということではない無限の愛から私たちがを愛する神よりも、誰が多く愛するだろうか。

神の愛

私たち一人ひとりに対する神の愛は、人間の愛と全く異なるわけではない。どうしてそのようなことが言えるのか。人間の愛はどこから来るのだろうか。自己を明け渡す情熱はどこから、その忠誠の強さはどこから、その抗しがたい強い喜びはどこから、損なわれていない時にその平穏と持続する幸せはどこから来るのだろうか。それらが全部そのようなにあるのは、神から来るからであり、いわば、神の見本であり、神とはいかなるものであるかのしるしだからである。人間が神のイメージと似姿に造られたのは、神の善を輝き出して神に愛を返すためである。罪はその愛を返すことの拒否であり、それが最悪なのは人間ができる最上のことを拒否するからである。

しかし、私たちがいかに努力しても、罪の悪についてはわずかな理解しか得られない。そして、理解があまりにもわずかなため私たちは罪を償うことができない。罪を理解するために神であることが必要である。罪を償うために人間でなければならない。主は神であり人間である—罪を理解する神、罪を償う人間。それが私たちの信仰である。それこそがカルワリオの真の意味である。

犠牲

単なる人間の観点から言えば、主のご受難と死は人間の悪によって引き起こされた人間の苦難の象徴である。それは人間の悪のドラマであり、人間の善徳の極致である。しかし、信仰にとってそれは宗教的礼拝の主要な行為であり、犠牲の行為である。すべての犠牲に共通していることは、それらが外的なしるしであり、

その表面的行為自体が持つよりもより豊かな意味が託されているということである。犠牲の奥には、それを達成しその余りある意味を与える犠牲心がある。

それは、崇拜の心である。単に「あなたが神」という驚きに完全に夢中になるということだけではなく、或いは、単に限らない威厳に満ちた現存の前に畏敬の念に打ちのめされるということでもなく、より単純により充実して主の最高の支配を認め、主への全て、つまり、心の全て、魂の全て、マインドの全て、力の全てを明け渡すことである。

それに犠牲心は償いの心であり、それは神が何であるかを知り、神に与えるべきことを与える他に、罪とは何であるかを知り、それを償うことを渴望することである。さらにまた、犠牲心は、私たちが所有し、また願うことができる全ての善いものの尽きることのない源泉への感謝である。特に贈物の中で最も大きな主御自身という贈物、聖性をもたらす恵みによって始まり至福直観を伴う親しさによって完成される主御自身という贈物への愛に満ちた感謝の心である。

犠牲心は懇願する心である。エリコ郊外の盲目の物乞いの叫びとなった心であり「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください。」(マルコ 10・47、ルカ 18・38)、百人隊長のうちに表わされた畏敬の心である「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません・・・ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。」(ルカ 7・6-7)。また、そのやさしい心のささやきは祈りによって天のいと高き所に届いた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ 23・34)。

それがカルワリオのイエスの心であった。しかし、「イエス・キリストを身にまといなさい。」(ローマ 13・14)。私たちが頭や心や肢体と、マインドや意志や感性を持っている。それらは誰のものか。私たちがそれらを好きなように使ってよいのだろうか。それは反抗と破滅の道であり、希望のない終わりに至る広く容易な道である。それらは一見私たちのもののように見え、実際に神から私たちに任されたものだろうか。それは十字架の道である。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(ルカ 9・23)それはまっすぐで狭い道だが、その終わりには復活という喜びの虹がある。

私たちはキリスト・イエスを身にまとうべきであり、まとわねばならない。崇拜心、和解心、感謝心、懇願心という主の犠牲心を身にまとわなければならない。しかし、キリストを身にまとうことは、私たちの意志よりも神の恵みによるところが大きい。私たちが願う心でも、何よりもまず神の恵みを求めて願うことであり、私たちのマインドが真理に照らされるようにと願うことであり、私たちの石の心が肉の心になるようにと願うことであり、神の道で私たちのやりたがらない肢体がしっかりするようにと願うことである。恵みによって行われた突然の大変化は、自然のゆるやかな次第に行われる過程とは衝突しただろう。だから、まず絶え間なく祈れるようにと祈れ。イエスが知るように私たちが知ることを、イエスが愛するように私たちが愛することを、彼が行なったように私たちが行なうことを、絶え間なく祈れ。その祈りによって私たちが古いアダムが引き出され、ほとんど気づかずに日々主キリストの愛の豊かさに私たちはますます陶冶されていくのである。

ミサ

私たちはイエス・キリストの犠牲心を身にまとうだけでなく、御自分を犠牲とされた捧げ物に与ることもある。カルワリオの丘で私たちのために与えられた御体、私たちのために流された御血は、毎日祭壇の上にある。くり返される日の出に、回転する地球が新しい日を常に迎える時、カルワリオで御自分の御体と御自分の御血を捧げられた同じ大祭司が、今も清らかな聖餐奉献を捧げられている。ただ、十字架の犠牲に血が流され、御ミサの祭儀には血が流されない。十字架の犠牲を私たちは目撃していない。しかし、御ミサに私たちは参与する。聖母の傍で主から愛された信心深い弟子聖ヨハネのように、私は来ることができる。嫌々ながらも正直に自分の罪を認めた泥棒のように、私は来ることができる。涙を流しながら十字架の下に膝間づき悔い改めたマグダレナのように来ることができる。しかし大事なのは、人がどのように来るかということではなく、主の犠牲心を身にまとうように、人類の罪の贖いと神の栄光の神秘のために主と共に犠牲を捧げるために祈ることである。

では、「ミサの聖なる犠牲から人間社会を救う力が引き出されること」は可能なのだろうか。誤解しないように気を付けよう。人間社会の持つ終わりなく続く文化的、社会的、政治的、経済的問題が、驚くべき奇跡の連続によって解決されると考えてはならない。もし問題が解決されるとすれば、それらは時間をかけ問題

がどのようなものであるかを見つけるような人、解決を考え出す才能を持ち、抽象的な理論から具体的な政策へと移行するために必要な判断力に恵まれている人々によってである。労働者が雇い主に願わないように、人が自分のためになすべきことをするようにと神に願ってはならない。しかし、神の恵みなしに人は、自分のためになすべきことを始めることができないのは明らかである。不信、妬み、憎しみは、労働の様々な分野を分ける。労働者、経営者、所有者を分裂させる。それは対立する政治上の派閥、文化或いは人種によるグループ、異なる国々をばらばらに分裂させる。家族は肉欲の流砂に飲み込まれて消え、子供たちは家庭なしに大人になる。学校は物質主義者を生み出し、大学は革命家を育てる。新聞、雑誌、本は、売り上げを伸ばすという高尚な目的のために、迷子になったマインドと性格の弱い人を利用する。その混沌の中で提案できるようになるためには、目標は最低限まで削り取られなければならない。それらが受け入れられるには、さらにもっと減らされなければならない。受け入れられたことの実行は約束されたものよりも尚少ない。

大異変から大変動に陥るように、私たちは危機から危機へと右往左往する。なぜなら、私たちの輝かしい西洋文明は知性的道徳的破綻に瀕しているからである。もう一度私たちは互いに愛することを学ばなければならない。もう一度私たちは神の国を第一に探すことによってのみ地上の生活が耐えられるものであることを学ばなければならない。公平無私で善良な人間として考えることができるように、もう一度私たちは小さな子供のように神を信じることを学ばなければならない。この先立つ深いレベルでは、ミサ聖祭は人間社会を救う力の源である。ミサ聖祭によってその時のニーズに注がれるカルワリオの犠牲のお陰で、信仰し希望し愛する人がいる。

もし、社会的問題への解決に対して効果的になるほどに人々の信仰、希望、愛が強められ、もし十分広いスケールで効果をもたらすほどに人々の数が増えたなら、それは大勢の人々がより熱心に私たちの主イエスの犠牲心を身にまとい、主とともに御ミサにおいて世界を贖う十字架の犠牲を捧げるからである。

‘The Mass and Man’ by Bernard Lonergan

“Shorter Papers” Collected Works of Bernard Lonergan Vol. 20, pp92-98 University of Toronto Press:
[An article published in The Canadian Messenger of the Sacred Heart 57 (June 1947) 345-50.

The Messenger is a publication of the Apostleship of Prayer, Toronto. The same article was reprinted in The Catholic Mind 45 (September 1947) 571-76. Paragraphing and divisions were somewhat different in the two versions, and the current edition draws on both.]

キリストの神秘体

キリストの神秘体の教義は、父と子と聖霊の互いのそして人々との具体的な一致、そして人々の互いのまた父と子と聖霊との一致を指している。それは「体」という具体的なものなので、体の持つ豊かさと強い相互のつながり、植物や人体に見られるような全身に張りめぐらされた広がりを持っている。最後に、単一の教義であるため、その多くの要素、多様な分化、広範囲な関係のネットワークのすべてを、一つの見解のうちに一挙に捉えるべきである。最後に、教義は超自然的なものなので、その単一の見解に関連する観点は神ご自身のものである。つまり、本や講義から神秘体について多くのことを学ぶことができるが、祈りと観想においてのみ、真にそれを知り察することができるようになる。

したがって、神秘体の全体的な豊かさの追求は講義と自習に任せて、そのような知識や評価を認める追求のために、豊かさの迷宮を導く一本の糸のように、たった一つの糸口として、単純ではあるが基本的でよく言われる「愛」というテーマを選ぼう。これには音楽のテーマのように多くの変奏曲が考えられるが、ここでは五つのポイントを考慮することにする。残念ながら、人間は一度に一つのことしか考えられず話せないから、これらのポイントは別々に考えなければならない。今、皆さんに求めたいことは、教義の中心は、真の神であり同時に真の人間である私たちの主イエス・キリストであるから、一つの教義にまとめあげられ統合されるその相互の種々の関係に注意することである。

第一に、永遠の御父から永遠の御子に対する愛がある。御父が神であるように、御子もまた神である。それ故、この愛は、神から神への愛である。さらに、神の無限の愛さずにはいられないすばらしさからほとぼり出る無限の愛である聖霊も同様に、また神である。

第二に、永遠の御父から人間としての御子に対する愛がある。三位一体の第二のペルソナは、神であり人間であるという二つの本性を持っておられるからである。先ほど、神である御子に対する御父の愛を考えた。今度は、人間としての御子に対する御父の愛について考えたい。何故なら、御子は二つの本性を持っておられるので、神としての御子への聖霊である無限の愛と、人間としての御子への少なめの愛という、二つの愛を御父が持っておられると考える人がいるかもしれない。他方で、「御子は神性においても人性においても同じペルソナであるため、御子が神であっても人間であっても御父はたった一つの愛である聖霊しか持たれない」と人は言うかもしれない。

この疑問を解決するために、福音書は一つの情景を私たちに見せている。公生活の初めに、イエスがヨルダン川でヨハネから洗礼を受けて水から出られると、聖霊が鳩の形をとりご自分の上に降り、天から御父の愛を証す声が聞こえてきた。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。」(マタイ 3:17)。人の子は絶えず御父に愛される御子であり、その愛は常に聖霊である。それは、神が人となられて、神から神への愛が神から人への愛となった、受肉の驚くべき当然の結果である。愛は、一人のペルソナに対するものであるため、神が人となられて御言葉が肉となられると、神である父が神である子を愛されるように、神の愛があふれ出て、神性の境界を越え、創造された人間を愛されたのである。

これは、キリストの聖とする恵みは無限であるという趣旨で、神学者たちが述べている真理である。ご存知のように、神の愛はご自身が造られた愛すべきもののためにあり、聖とする恵みは、神から愛された被造物に与えられた神性のすばらしさである。それ以来、人としてのキリストに対する永遠の御父からの愛は、

神に対する神の愛であり、キリストの聖とする恵みは、受けられたものとしては有限であるが、恵みとしては無限である。

第三に、人々に対する人間としてのキリストの愛がある。それはイエスの聖心の愛であり、人間の意志からの愛であり、人間の知性に動機づけられ、人間の感覚をとおして働き、人間の情緒と感情と心情に鳴り響き、骨と筋肉と肉体の組み合わせ、表情の豊かさ、快樂と苦痛、歓喜と悲嘆、喜悅と苦悶に対する恐るべき能力を持つ人間の体によって実行される。それは、よき羊飼いの愛である。自分の羊を知っており、自分の羊にも知られ、羊のために命を失う用意ができています(ヨハネ 10・14-15)。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」(ヨハネ 15・13)。それは、この世に真理を教えるという崇高な使命を持つ一人の人間の愛である。「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。」(ヨハネ 18・37)。理解されず伝えることもできない秘密を持つ人間の愛である。では、キリストはどのようにして、一人の人間である自分が神であることを伝えることができるのだろうか。屋根の上からその秘密を叫んでも、それは人々に自分を愚かだと思わせるだけである。友人に打ち明けても、彼らを当惑させるだろう。最高法院の裁判官の前で、キリストは、自らを神と証言したため、神への冒瀆とみなされ、残虐な死刑を言い渡された。その愛は一種の挫折を招いた —— 私の血は何の役にたつのか。信じようとしなない人々にとって、生きること死ぬこと何のためだろうか。彼らは、信じて愛さないし、愛してもあまり熱心ではない。愛は愛であり得るのだろうか。すべてを与えないという愛があるのだろうか。キリストの愛はすべてを与える。にもかかわらず、それで幸せになれるのだろうか。愛された人たちが、同じように完全に自分を明け渡さなくても、イエスはそれでいいと言われるだろうか。私たちはどうだろう。

第四に、私たちに對する永遠の御父の愛がある。最後の晩餐で、彼を信じるすべての人たちのために、主は、天を仰いで御父に祈られた。「あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。」(ヨハネ 17・21-23)

「わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられた」。私たちは、御父の御子への愛を知っており、この言葉には驚かされる。私たちは、その愛が聖霊であることを知っている。神としての御子に対する御父の愛は、人間としての御子にまで広げられた。では、御父が御子を愛されるように、私たちが愛されるのは本当だろうか。キリストの聖とする恵みが私たちに伝わるというのは本当だろうか。御父からも愛されたキリストの人間性を造った神性のすばらしさもまた、私たちに授かっているのは本当だろうか。答えは福音書にある。「わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられた」(ヨハネ 17・23)。キリストがヨルダン川の水で洗礼を受けられたのは、ご自身のために恵みを得るためではなく、父と子と聖霊の御名において、私たちの洗礼の内なる結果を人々が目の当たりに見ることができるようにされたのである。

永遠の御父は神である御子を聖霊という愛をもって愛されるように、同じ愛ともっとも崇高な賜物である聖霊をもって、人間としての御子を愛される。「時が満ちると、神はその御子をお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が『アッバ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。」(ガラテヤ 4・4-6)

神の子とされたことにより、被造物ではない聖霊という賜物により、私たちの魂に聖なる恵みを注がれる

ことにより、私たちは新しく生まれる。私たちの罪は赦され、神の御前で義とされ、神の友人、子ども、天の国の相続人となる。より崇高な命の新しい源泉が私たちに植えつけられ、そこから、注がれた徳と聖霊の賜物が、絶え間なく流れ出るのである。

その新しくより崇高な命は、孤立して生きることではない。それは、キリストの肢体としての命であり、キリストと一致している度合に応じてその命が開花するからである。キリストはぶどうの木であり、私たちはその枝である。枝がぶどうの木から切り離されると枯れて死ぬように、私たちもキリストから離れると、恵みの命を失う。枝は完全にぶどうの木と結ばれると花を咲かせ実を結ぶ。私たちもまた、キリストと完全に結ばれた時、花を咲かせ実を結ぶ。「生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。わたしの肉を食べ、私の血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもいつもその人の内にいる。」(ヨハネ 6・57, 56)

ご存知のように、生物の体とキリストの神秘体との完全な類似はない。肢体あるいは生体の各部分は、それら自身が異なる存在ではなく、あなたの手がすることは、あなたがするのである。手は、それ自身のための何かではない。しかし、神秘体の肢体は、それ自身が異なる存在をもち、あなたの行為は、あなた自身のものであり、最後の審判の日に、キリストではなくあなたが、その精算をしなければならない。また、生物の肢体は手や胃のためにあるのではなく、手も胃も体のためにある。しかし、神秘体においては、肢体は体のためにあるのではなく、体が肢体のためにあり、肢体はキリストのためにあり、キリストは神のためにある。すべてはあなたのものである。しかし、あなたはキリストのものであり、キリストは神のものである。

「・・・一切はあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。」(コリント I 3・22-23)

もし私たちがキリストの体のうちに自分をそのまま残しても、もはやそれは私たちのものでない。キリストの霊が私たちに与えられているように、私たちはキリストに与えられているのである。「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」(ローマ 14・8)「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。」(コリント I 6・19-20)

私たちは自分のものではないので、自分を放棄し自分に死ななければならない。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(ルカ 9・23)「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」(ヨハネ 12・24)「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」(ヨハネ 12・25)。聖パウロがコロサイ人に言っているように、「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストとともに神の内に隠されているのです。」(コロサイ 3・3)

ローマ人へ書いたように、「わたしたちは洗礼によってキリストとともに葬られ、その死にあずかるものとなりました；あなたたちはキリストとともに死んだのです。」(ローマ 6・3-4)。彼はガラテヤ人へ書いた、「キリスト・イエスのものとなった人たちは肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。」(ガラテヤ 5・24)。彼はコリント人へ書いた、「キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きていた人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きるこ

となのです。」(コリントⅡ 5・14-15)。彼は自身のことを証言した、「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしはキリストとともに十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」(ガラテヤ 2・19-20)

ところで、キリストが私たちの内に生きるとはどういうことなのだろうか。私たちが知っていることや言えることよりも、もっと豊かな意味をもっている。つまり、少なくとも、私たちの内にある恵みの命は自然にもたらされたものではなく、惜しみなく神から与えられた贈物であり、元来の神の子、御父からもっとも愛された者であるキリストに属している。また、たとえ私たちがそのような命を生きても、依然として私たちは、自分自身を放棄し、自分に死ぬことにより、キリストとともにキリストの内にキリストによって生きるのである。そのような命の完全さは、天の御父のように完全であり、私たちの理解と知恵を凌ぐ。私たちは自分の健全な常識に照らして生きることはできず、御父と私たちのうちに宿る御子によって私たちに与えられ送られた聖霊の導きと靈感を通してのみ生きることができるのである。命の目的と最終の究極目的は、至福直観である。それは、キリストが聖母の胎内に宿られたその瞬間から御子の権利としてもっておられたヴィジョンであり、キリストとともに苦しみキリストとともに栄光を受けるときに私たちのものとなるヴィジョンという意味である。

御父の御子への愛、御子の私たちへの愛、御父の私たちへの愛のほかに、もう一つの愛がある。それは、私たちに与えられた聖霊によって私たちの心の隅々にまで行き渡る神の慈愛(チャリティ)である(ローマ 5・5)。

聖パウロがローマ人へ書いたように、「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」(ローマ 8・35、37-39)。

敬愛する神父様方と兄弟のみなさん、聖パウロが書いた慈愛が、同じ聖霊によってあなたたちにも与えられているのである。それは、受洗のときにも、告解での大罪の赦しのときにも、神の全能の力によって私たちの意志に植えつけられた超自然の徳であり、魂のうちに聖とする恵みとともに増していく徳である。この慈愛は豊かに与えられており、あなたがイエズス会に入るときに福音的助言に従いこれまで召命を生き抜くことを可能にしたのである。しかしそれは、諸徳のなかの特例であり、他の徳は中庸にある。慎重さや正義、剛毅や節制において、人は限度を超えることがある。しかし、慈愛は、手段ではなく最終の究極目的を目指しており、限度を知らない。故に、最高に重要な掟は、すべての心、すべての魂、すべてのマインド、すべての強さを尽くして神を愛することである。同じように、第二の掟は、最後の晩餐でのキリストの祈りが成就されるために、自分を愛するように隣人を愛し、キリストが私たちが愛されるように互いに愛し合うことである。「わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。」(ヨハネ 17・22-23)

主と共にその祈りを祈ろう。主は絶えず私たちのためにとりなして生きておられ、今も、最後の晩餐の祈りを祈っておられる。

主と共に祈ろう。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」(マタイ 18:20)。私たちは主の御名にののもとに、一つに集められている。

一人ひとりが、自分のため皆のために求めよう。主の恵みと愛が私たちのうちでますます大きくなるように、これまで以上により完全に自己放棄するように、私たちは自分のものではなく主のものであるということにより完全に認識するように、そして、神としての御子から人間としての御子にまで広げられた無限の愛が、主のご受難と死、教会と秘跡を通して、私たちにまで広げられているという、より深い喜びになるように、求めよう。

自分のためだけではなく、キリストの神秘体全体のために願おう。すべての肢体が恵みの命を生き生きと生きることができるように、不安や苦難に傷つけられたこの時代に、神に完全に捧げられた聖人の数が増え、御父の普遍的な救済の意志にしたがい、すべての人間が入ることができるほど巨大に神秘体が成長するように願おう。

[A domestic exhortation given at the Jesuit Seminary, Toronto in November 1951. The domestic exhortation was a talk on some spiritual subject delivered to the seminary community once a month during the academic year. As a professor of theology at this time and a member of the community, Lonergan would have been invited by the Rector to give this exhortation.]